

周作人の銭玄同宛書簡における隠語について

陳潔 著
阿部沙織 訳

論文摘要：周作人在致钱玄同的信函中大量使用隐语，这不仅是文人雅趣，也是因为当时的私信会有官方检查。周作人在信函中使用隐语，有时是为了隐匿自己及友人对重要事件的讨论，以避免官方检查时的一览无余；有时则是在讨论具体事件和编辑安排中隐匿人名；有时也只是游戏笔墨。本文对周作人致钱玄同信函中隐语的以上三个功能作了具体论述。其中涉及的主要事件包括周作人在《新青年》分化时期的思想，《新青年》从八卷一号开始为马克思主义研究会主控，周作人此后发表在《新青年》上的文章曾有文字被编辑改动，从而产生了对“统一思想”的忧虑。这种对“统一思想”的担忧，是周作人、钱玄同认为《新青年》分化的重要原因之一。还通过信函进一步证实了周作人在北京时期《语丝》的编者身份，并反映出当时语丝社成员的活动情况。

关键词：周作人；信函；隐语；《新青年》；《语丝》

周作人の日記、書簡、蔵書等の資料の多くが目下、未整理・未公刊の状態にある。周作人日記は既に北京魯迅博物館によりその大部分が整理され書籍化されているが、出版には至っていない。また、周作人の膨大な蔵書は中国国家図書館に保存されているが、現時点では専門家による分類がなされていない。しかし、周作人の長男、周豊一が同館に提供した「周作人書籍細目」に基づいて

検索することは可能である。一方、北京魯迅博物館は近日、所蔵する周作人の銭玄同宛未公開書簡、数百通を書簡集として出版する。

周作人の書簡は独特の風格を備えた筆致で、偽りなく思想・感情が記録され、多くの歴史的手掛かりも記載されており、周作人の思想と行動を研究する上での重要な史料である。その中でも銭玄同宛書簡においては大量に隠語が使用されている。これは文人の雅趣であったばかりでなく、私信が当局に検閲される可能性を考慮してのことであった¹。周作人が書簡において隠語を使用したのは、第一には自身および友人の重要な事柄に対する議論を隠匿し、当局の目に触れることを防ぐためであり、第二には具体的な出来事を議論したり、編集の手配をする中で人名を秘匿するためであった。第三にはただの言葉遊びに過ぎなかった。本稿では周作人の銭玄同宛書簡を主な手掛かりに、書簡中の隠語を主な研究対象とし、隠語の上に述べた三つの機能について具体的に論述したい。その中で『新青年』分化期における周作人の思想、『語絲』の編集状況などにも触れる。

一

1920年12月、周作人と銭玄同は頻繁に書簡を往復させており、そのほとんどで『新青年』の変化について議論していた。『新青年』の編集は北京から上海に移り、八巻一号からは「マルクス主義研究会」に主導権を握られていた。『新青年』八巻一号が既に中国共産党上海の機関誌となっていたかについては、研究者の間でも目下見解が分かれている²。『新青年』第八巻がそれ以前の誌面の様式を留めていたのに加え、北京の同人への原稿依頼も続いていたからだ。これは陳独秀と新たに編集に加わった陳望道が協議して一致させた編集方

1 「検査過的私信」（『語絲』第一百十二期、1927年1月1日）の筆者Cy先生は、周作人と通信した際、書簡が当局の検査を受け、「裏に『検察員検査済み』の長円形の印章が押されていた」としている。

針であった。しかしそれでも、北京の同人のほとんどが寄稿に積極的ではなかったのは、『新青年』のこれまでになく鮮明になった政治的色彩と関係があった。また、北京側は既に『新青年』の編集権を失っていたため、新たな編集者に原稿がどのように扱われるかを懸念していた。

1920年12月16日朝、この月から編集長となった陳望道は周作人に書簡で朝の挨拶を書き送り、またこのように記した。「前の二期は校正に甚だ綿密さを欠いており、損なわれた価値は少なくありません。今後三校は私自身で校正を行いたいと思います、そうすれば少しは改善されるかも知れません」³。しかし陳望道のこの書簡を周作人が受け取ったのは三日後で、1920年12月19日の日記に記載がある。「……陳望道君の上海十六日の手紙を受け取る」。その上で翌日に陳望道に返信している⁴。陳望道の書簡を受け取った翌日、周作人は錢玄同に宛てた書簡の中で自身の偽らざる思いを吐露した。「『鮮藍歳』の総裁を代行する田張路公〔陳望道を指す〕が手紙を寄越しました。彼は過去の数期は誤字があまりに多かったので、今後は自分で三校をするつもりだと言っています。誌面を大いに整頓するつもりなのでしょう。しかし彼が用字統一をしないようにできれば（できるだろうか）、もっと良いのですが」⁵。

2 史学界では『新青年』が第8巻第1号から中国共産党上海の機関誌となったと認識されており、この見解は現在まで長年踏襲されている。丁守和「陳独秀和『新青年』」（『歴史研究』1979年第5期、50頁）、陳長松「陳独秀前期報刊実践与伝播思想研究」（1897-1921）（暨南大学2012年博士学位論文、98-102頁）等参照。一方、莊森はこの見解に疑問を提出し、羅志田も莊森の説に賛同している。莊森「『新青年』第八卷還是社團『共同』刊物—中国現代新聞伝播史重要史実辨正」（『社会科学戦線』2008年第6期、122-130頁）、羅志田「陳独秀与“五四”後『新青年』的轉向」（『天津社会科学』2013年第3期、第117頁）参照。また、歐陽哲生は『新青年』が8巻1号から中共上海發起グループに主導権を握られ始めたとしている。歐陽哲生『五四運動的歴史詮釈』（北京大学出版社、2012年9月、26頁）

3 「關於『新青年』雜誌的通信」『陳望道文集』第1巻、復旦大学語言研究室編、上海人民出版社1979年10月版、555頁。

4 『周作人日記（影印本）中』、大象出版社（鄭州）、1996年12月、163頁。

5 「周作人為祝賀『東遷』致錢玄同函」1920年12月20日、未公開書簡、北京新文化運動紀念館所蔵。原文：田張路公代理『鮮藍歳』的總裁，曾有乙書信來過，他說前幾期錯字太多，以後要自己三校，大有整頓之意；但他如更能不（能）統乙用字，那便好了。〔訳注：以降、本文中の訳注は〔〕で示す〕

周作人は1920年12月16日——陳望道が周作人に書簡を書いたのと同じ日、既に錢玄同宛書簡の中で密かに当時の『新青年』に対する不満を表明していた。まずは原稿中の字句を手直しされることへの不満である。「『新青年』については、私もそこまで鈍感ではなくなりました。原稿を送る時に字句を変えないよう言明し、もし守られないようなら、その時は、私では文才に欠けると恐縮ながらお伝えし、しばらくこの『鮮緑歳』とは絶交します。『彼ら（渠們）』の繩張りでは彼らが文体を統一するのにまかせるしかなく、『彼ら（渠們）』と口論してわざわざ面倒を起こすにはおよびません」⁶。ここでの『鮮緑歳』とは『新青年』を揶揄した隠語であり、周作人はこれによって、この時変化を生じていた『新青年』に賛同しかねる意を既に表出させていた。この後、周作人は書簡でそれを明示した。「『新青年』の最近の内容には、私は本当に賛成しかねます。社会問題はわからないので、自ら論ずることはできず、読むのもあまり好きではありません。政治社会を論じるものと、文学および道德などの事柄を論じるものを分けて、二種類の雑誌にしてもらいたいと私は希望しましたが、ついぞ叶いませんでした。このようなことが続けば恐らくは『大学月刊』と同様、各方面の人々に不満を抱かせることになるでしょう」⁷。

1920年12月16日付陳望道の周作人宛書簡と、同日の周作人の錢玄同宛書簡から推論するに、『新青年』に対する周作人の態度が変化した直接の原因は、この時期に周作人が『新青年』に寄稿した文章の語句が改変されたことにあると考えられる。これ以前の1919年8月21日、周作人は錢玄同宛書簡の中でこ

6 「周作人為歌謡研究会開會及『專制』和『新青年』的看法致錢玄同函」1920年12月16日、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館所藏。

原文：至於『新青年』那面，我也不是那樣的麻木了。我想寄稿去的時候，當聲明不要改變原稿文句；倘不遵行，那時我只能敬告不敏，暫時和這『新青年』絕交了。「渠們」的板上，只能任其統乙，不值得自尋麻煩，和「渠們」鬪口了。

7 同上

原文：『新青年』近來的內容，我實在不大贊成。因為我自己是不懂社會問題的，所以自己不能說，也不大喜歡看。我希望將說政治社會的，與說文學及什麼道德等事的，分作兩種雜誌，但是終於做不到；這樣下去恐要同『大學月刊』乙樣，使得各方面的人都不滿足。

のように記している。「何本か感想を書いて『新青年』に載せたかったのですが、結局一本のうち半分を書きあげたのみでした。編集にはまだ早かろう、あるいは少し遅れても差し支えあるまいと思ったのです」⁸。八巻二号に至っても、周作人の『新青年』への態度に変化はない。「『新青年』八の二、羅素の文章、実に難解である！」⁹。

陳望道が書簡で挙げた、校正が行き届いていなかった「前の二期」とは、おそらく『新青年』八巻三号と八巻四号を指している。『新青年』八巻三号には周作人の「雑訳詩二十三首」、訳劇「被幸福忘却の人們」が掲載された。八巻四号（1920年12月1日）には周作人の「児童の文学」、新詩「児歌」「慈姑の盆」「秋風」のほか、千家元磨^{せんげもとまろ}「深夜の喇叭」の周作人による翻訳も掲載された。「児童の文学」は半月後の12月14日、『時事新報・学灯』に転載されている。

1920年12月16日付錢玄同の周作人宛書簡からは、『時事新報・学灯』に「児童の文学」が掲載された際にも字句の改変がなされていたことがわかる。この時『学灯』は東京高等師範学校を卒業した李石岑が編集していた¹⁰。錢玄同は『学灯』掲載の「児童の文学」の中に「底」「地」「渠」「渠們」「哪」等の文字を目にする¹¹。周作人は文章を作るにあたり本来これらの文字を使わなかったため、編集者が改変を行ったことは明らかだった。周作人が原文で使用した「的」「他」「他們」「那」等の字は「底」「渠」「渠們」「哪」等の字に改変されていた。『学灯』掲載の「児童の文学」から何段落か抜き出してみるとこのような改変が見て取れる。

8 「周作人為存款購書事致錢玄同函」1919年8月21日、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館所藏。原文：我想寫幾條感想，登入『新青年』，終於還只寫了半條；想編輯尚早，或略遲不妨乎？

9 「周作人為轉交稿件贈書等事致錢玄同函」1920年10月9日、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館所藏。原文：『新青年』八之二羅素的文章，真不易懂呵！

10 「『学灯』編集者一覧表（1918-1922）」、吳静「『学灯』与五四新文化運動」、復旦大学2009年未刊博士学位論文、37-38頁。

11 錢玄同「致周作人」1920年12月16日、『錢玄同文集』第6卷、中国人民大学出版社2000年8月、40頁。

以前の人對於兒童多不能正當理解，不是將他當作縮小的成人，……便將他看作不完全的小人，說小孩懂得甚麼，一筆抹殺，不去理渠。近來才知道兒童在生理心理上，雖然和大人有點不同，但渠仍是完全的個人，有渠自己的內外兩面的生活。……

……

第二，……所以我們可以放膽供給兒童需要的歌謠故事，不必愁彼有什麼壞的影響，但因此我們又更須細心斟酌，不要使彼停滯，脫了正當的軌道。……兒童相信貓狗能說話的時候，我們便同渠們講貓狗說話底故事，不但要使得渠們喜悅，也因為知道這過程是跳不過的……等到兒童要知道貓狗是什麼東西的時候，我們再可以將生物學底知識供給渠們。¹²

錢玄同は書簡において、他の改稿事件にも関連づけて議論を広げ、より具体的に「文字使用権」への意見を述べた。

邵力子、陳望道、沈玄廬の諸公は『覚悟』の通信欄にまで手を入れようとしており、宜しくないと感じています。今のあちらの情勢は、国民党の新聞〔『覚悟』を指す〕から進歩党の新聞〔『時事新報』を指す〕に侵入しています。あちらが侵入するかしらないかは、もとより我々と関係はありませんが、この二大政府が我々の「文字使用権」を奪おうとするのには、抗議せずにいられないでしょう。あなたはフゴフゴ女〔胡適を指す〕が「私は『他』の字の下に『女』の字を注記する方法に反対します」と声明した手法を真似るのが良いだろうと思います。そして「これらの原稿を転載したい方は、原文を改変しないでください」と声明するのです。現在、陳望

12 周作人「児童の文学」、『時事新報・学灯』1920年12月14日、1面。文中の省略記号、太字は著者による。

道が編集する『新青年』については、彼の編集によるものが一期出してから書くかどうか決めます。もし彼が他人の原稿を彼等の「哪」「渠」……などの字面に変えなければ、何も言うことはありません。そうでなければ、抗議せざるを得ないというだけです。¹³

錢玄同はさらにこのように説明する。「那」「哪」の区別と「他」「伊」「彼」の区別については、実のところ相対的には賛成だと言うこともできる。反対しているのは「彼らが『用字新例』を定めたことで、まさか世の人々に王の掟に従うことを強要するということでしょうか」。¹⁴

字句の変更は見解の相違の表れであった。周作人、錢玄同が字句の変更に対しても敏感だったのは、「的」「他」「他們」「那」等と「底」「渠」「渠們」「哪」等の用法の区別は、白話文における重要問題と見なされており、新文化人は早くも1919年前後に専門的・学術的な議論を交わし、学術上の判断を下していたからだ。1919年11月から12月にかけて、『晨报』の「通訊」「論壇」「討論」欄では、「的」の用法についての討論が延々と展開された。1919年11月12日、胡適は『晨报』掲載の『晨报』記者との通信「『的』字的用法」の中で以下のような見解を明確に示した。「我个人の考えによれば、『底』の字はなるべく使わないことです。『底』をどうしても使いたいのであれば、詳しく用法を規定すべきで、「術語（専門用語）」と「助詞」の違いだというだけでは十分ではありません」¹⁵。その上で詳細な論考「『的』字的文法」¹⁶を記事に添付している。11月19日、沈兼士、陳独秀、錢玄同が議論に加わると、沈兼士は「我对于『的』字問題的意見」¹⁷を発表した。錢玄同はこの文章に附記する形で、陳独秀の見解を引用した。これを受けて11月22日、陳独秀が「論『的』字底用法」¹⁸を

13 同注11、40-41頁。〔訳注：『錢玄同文集』引用箇所注釈によると、「ㄉㄨㄛˊ」は“doctor”を表す注音符号で、胡適を指す。〕

14 同注11、41頁。

引っ提げて議論に加わった。続いて11月23日、劭西也も「『的』字的用法『解紛』」¹⁹を書いて議論に加わる。11月25日には胡適が「再論『的』字」²⁰を書いている。翌日の11月26日、胡適はさらに「三論『的』字」²¹を発表した。11月27日、抱影が「的字用法底問題」²²を発表。11月29日には傅斯年が議論に加わり「討論『的』字的用法」²³を発表、翌日にもその続編²⁴を発表した。11月30日『晨報』には有建候「關於的字用法專答抱影」²⁵が掲載された。12月2日、錢玄同が「我現在對於『的』字用法底意見」²⁶を発表。12月3日、劭西が「『的』字問題的討論」²⁷を発表した。12月3日の『晨報』第七版の左下角には「注意『的』問題は第五版に移動」²⁸という但し書きまで現れており、当時の読者が「的」の問題に注目していたことが見て取れる。さらに12月5日には傅斯年が「再申我對於『的』字用法的意見」²⁹、12月10日には沈兼士が「關於『的』『得』兩字通用的意見」³⁰を発表している。

15 「『的』字的用法」(通説、『晨報』1919年11月12日、7面。胡適はこの手紙の中で、止水が述べた「『的』の字は術語(専門用語)として使い、底の字を助詞として使う」方法は、晨報が現在一律「底」を用いているのよりは少しでしたが、このような主張はやはり綿密さに欠けている」との見解を示している。翌日、止水は自らの意見について弁明した。「答『適之』君『的』字」(論壇、『晨報』1919年11月13日、7面。14日には建候が議論に加わっている。建候「關於『的』字用法之私見」(論壇、『晨報』1919年11月14日、7面。建候「對於『的』問題再表私見」(論壇、『晨報』1919年11月20日。

16 「『的』字的文法」、「『的』字的用法」附録、『晨報』1919年11月12日。

17 沈兼士「我對於『的』字問題的意見」(論壇、『晨報』1919年11月19日。

18 陳独秀「論『的』字底用法」(論壇、『晨報』1919年11月22日。

19 劭西「『的』字的用法『解紛』」(論壇、『晨報』1919年11月23日。

20 胡適「再論『的』字」(通説、『晨報』1919年11月25日。

21 胡適「三論『的』字」(論壇、『晨報』1919年11月26日。

22 抱影「的字用法底問題」(論壇、『晨報』1919年11月27日。

23 孟真「討論『的』字的用法」(通説、『晨報』1919年11月29日。

24 孟真「討論『的』字的用法」(続)(通説、『晨報』1919年11月30日。

25 建候「關於的字用法專答抱影」(論壇、『晨報』1919年11月30日。

26 錢玄同「我現在對於『的』字用法底意見」(論壇、『晨報』1919年12月2日。

27 劭西「『的』字問題的討論」(討論、『晨報』1919年12月3日、5面。

28 『晨報』1919年12月3日、7面。

29 孟真「再申我對於『的』字用法的意見」(討論、『晨報』1919年12月5日、5面。7面の左下隅にはやはり「注意 本日第五版にも『的』問題の論文があります」と但し書きがある。

1920年12月17日、周作人は錢玄同への返信の中で、初めて当時の様子を「思想統一」だったと総括している。「進歩党と国民党の二派が共謀して思想を統一するのは、実に恐ろしいことです。しかし我々は「自由を争う」等ということにあまり熱心ではなく、それゆえ『彼ら（渠們）』が現行の『例』を用いて我々を統一するのにかまかせるしかなかったのです。……力子公は著作権はあるべきでないとかまで主張していました。まるで、誰かが何かを創作したら、それはそのまま出版者たちの材料になることが運命づけられているかのようです。そうであるなら、我々には抗議に赴く何の『権利』があるのでしょうか？もしも方法の無いところに方法を求めるのならば、『成り行きにかまかせる』という方法が唯一あるのみです。私が前回述べた、分裂するのにかまかせるというのは、すなわちこの方法です³¹。二人の通信に、ここで初めて「思想統一」への憂慮が持ち出された。

錢玄同は当日に返信し、更に多くの隱語を使用して『新青年』の現状について意見を述べた。

私はこのところ強く感じているのですが、中国「の（底）」小民が「マ
チヤク！虫メ厂！」だとか「ケメル虫ヤメ！チヤ虫メ厂！」だとかを語る
のは、実に不釣り合いなことです。「彼ら（彼等）」が悪いと言っているの
ではありません。本当に「彼ら（渠們）」「の（底）」程度が低すぎるのです。

……

諸公が「用字新例」を補充し日々『覚悟』への来信に手を加えるような

30 沈兼士「關於『的』『得』兩字通用的意見」（十一月二十九日稿）（論壇）、『晨报』1919年12月10日、7面。

31 「周作人致錢玄同」1920年12月17日、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館所蔵。

原文：至於進國兩派合謀，統一思想，誠屬可怕之事；但我們不大熱心於「爭自由」等事，所以也只好任「渠們」用了現行「例」來統一我們也。……力子公還主張不應該有板權，似乎乙個人做了東西，是天上注定給那些出版者做材料的；既然如此，我們還有什麼「權」去抗議呢？要於沒有法子中求法子，則唯有「聽其自然」乙個法子了。我前回所說任其分裂，即是此法。

やり方を、おそらく陳公は「未だ目にしていな」い状態で『アタラシイアオイトシ』を編集するので、いきおい他人の文章の「他」「那」「的」等の字をせっせと直しにかかることでしょう。ですから、あなたが寄稿する時、原稿に手を加えてはならないと声明するだけでは曖昧にすぎます。「彼等」は変えてはならない、と直接説明するのがよろしいかと思えます。³²

『新青年』の今後の編集方針を問う胡適 1921 年の公開書簡「致守常、豫才、玄同、孟和、慰慈、啓明、撫五、一涵」に名を挙げられた各同人〔李大釗、魯迅、錢玄同、陶孟和、張慰慈、周作人、王星拱、高一涵〕は、これに答える形で書簡末尾に意見を書き入れた。錢玄同は「思想統一」への憂慮を文字にし、分裂の原因を明記した。「玄同の意見は周氏兄弟とほぼ同じで、やはり二誌に分裂するのが良いと考えています。こちらとあちらで譲らずそれぞれ引張りあうのでは、結果どちらも敗れ傷つくことになります。無意味なだけでなく、『新青年』同人が『思想統一』を主張していると外部から誤解されるほどみっともないことはないと思います」³³。このように「思想統一」への憂慮は、周作人と錢玄同が『新青年』の分裂を認める主な原因の一つとなった。

『新青年』分化問題の上で、周氏兄弟の態度は大方一致していたが、相違もわずかながらあった。魯迅は前述の公開書簡に先立ち胡適から『新青年』編集について三つの方法を提示され意見を求められた際、兄弟ふたりの意見を胡適に伝えた。周作人は第二の方法に従うのが良いと考えており、魯迅は三つの方法どれでも構わないが、「もし北京の同人がどうしてもやろうと言うのなら、

32 錢玄同「致周作人」1920年12月17日、『錢玄同文集』（第6巻）、第42頁。「ㄇㄛˊㄩˊㄎㄨㄟˊㄩㄥˊ」は「安那其主義（アナーキズム）」を表す、「ㄅㄨㄛˊㄩㄥˊㄩㄥˊㄩㄥˊㄩㄥˊ」は「布尔什維克主義（ボルシェビキズム）」を表す注音符號。『アタラシイアオイトシ』は『新青年』を指す日本語。〔訳注：引用元文献の原文は『アタテシイアテイトシ』とあるが、「テ」はそれぞれ「ラ」と「オ」の誤植と考え、本訳稿では『アタラシイアオイトシ』と表記している。〕

33 錢玄同による注釈、1921年1月26日付「陳独秀在胡適關於停辦『新青年』信件上的批注及胡適有關於此事的信件」、北京大学所藏。

上の二つの方法でよいわけですが、第二の方法の方がより順当で」³⁴あるとした。第二の方法とはすなわち、1920年12月胡適の陳独秀宛書簡の中で書かれていた「『新青年』の編集のことを、九巻一号から北京に移すよう主張します。北京の同人は九巻一号内に新しい宣言を出し、ほぼ七巻一号の宣言にもとづいて、学術・思想・芸文の改造に重点を置き、政治を語らずと宣言するのです」³⁵というものだった。

二

1925年6月25日、周作人は錢玄同宛書簡の中で、当時行われた宴会について、また『語絲』数期の原稿手配について記した。書簡は晦渋でありながら雅趣にもあふれ、宴会の招待客には全てあだ名があてられている。主賓は「押不盧先生」、その他来賓は以下のように記される。「来客を数えると、押先生は夫人同道、曲園、香濤、廉卿、亭林、良庭。良庭夫人は見目がよろしくない（スタイルがよろしくない？）ため参席しなかったとか」³⁶。

この書簡の原本には日付がなく、封筒もないが、内容から1925年6月25日に書かれたものと推定できる。書簡には少なくとも四点、日時に関する情報が書き込まれている。(1) まず、書簡で言及されている『語絲』の編集状況から、1925年に書かれたことがわかる。(2) 「時維屈子投江之日」³⁷の一文から、1925年の端午節（6月25日）であることがわかる。(3) 第三の情報は前述の日付を裏付けるものである。同日の『晨报』は、午後、天安門で追悼会が行わ

34 魯迅「210103 胡適」、『魯迅全集』第11巻、387頁。〔訳文は『魯迅全集』第14巻（竹内実責任編集・翻訳）、学習研究社、1985年、91頁より引用〕

35 同上注[2]、387-388頁。〔訳文は92頁より引用〕

36 「周作人致錢玄同」1925年6月25日、「周作人（此刻現在靠不住弟）關於宴客及『語絲』文稿和猛語異同辨致錢玄同函」、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館文物庫所蔵。原本には日付なし、封筒なし。内容から1925年6月25日執筆と推断できる。

原文：計来客中、押先生偕夫人、曲園、香濤、廉卿、亭林、良庭、良庭夫人則因形式不雅觀（不匀称？）而不至云。

37 同注36

れ、劉清揚が祭文を読むと伝えている³⁸。周作人書簡の原文は「新聞によれば今日午後胡二五「齋務長」が泣き屋を従えて天安門で挙哀すること、まず一絶倒です。九二女士が祭文を朗読すること、二絶倒です。祭文は全てでたらめで、これまでのでたらめ思想の精華と言っていていいでしょう……年季入りの国粹です」³⁹。ここでの「胡二五」は胡適であろう。「九二女士」は劉清揚、張崧年の妻で、書簡では「この大不敬な呼称は崧年君には知られぬよう」⁴⁰と念を押している。(4)「例の手紙をようやく書き終えたところで、殷洪喬が6月21日の手紙を届けてくれて、あなたの腕の傷が軽かったことを嬉しく知りました。」⁴¹。四つ目のこの記述から、同書簡執筆中、周作人が別の書簡を受け取り、錢玄同の怪我について知ったとわかる。

1925年6月25日のこの書簡において、周作人により隠語であらわされた人物については、周作人1925年6月24日の日記および錢玄同の周作人宛書簡⁴²等の史料から、考証できる。主賓の「押不盧先生」は林語堂で、「曲園、香濤、廉卿、亭林、良庭、良庭夫人」はそれぞれ兪平伯、張鳳拳、張申府、顧頡剛、江紹原、江紹原夫人である。周作人はここで古人の姓を用いて彼らの別称としている。「香濤（張之洞の字）」、「廉卿（張廉卿〔清末の散文家〕）」はどちらも張を姓とするため、周作人はこの二人について手紙の中でわざわざ注釈をつけ説明している。「こちらのお二方は烹妾山人の一族で、そのうち一人の号は四靈の一つである。もう一人は十二支の一つであり、その字義は『景山樓説文』に照らすとひどく典雅に欠けるとか」⁴³。「烹妾山人」は「張」姓の者を指して

38 「各界踊躍参加大示威」、『晨报』1925年6月25日、6面。

39 同注36

原文：報載、今日下午胡二五「齋務長」將率領哭團在天安門舉哀，一絶倒。九二女士將朗讀祭文，二絶倒。祭文中滿是胡說，可以說是歷來荒謬思想之精華……真正老牌國粹。

40 同注36

原文：此大不敬之稱呼，勿令崧年君知。

41 同注36

原文：那張信才寫畢，殷洪喬又將鄂（=6）謨耳（=21）之書至，欣悉尊臂受傷不重。

42 錢玄同「致周作人」1925年6月25日、『錢玄同文集』第6卷、66-70頁。

おり、張巡〔唐代の武将〕が妾を殺して兵士の食に供した故事に由来する。この注釈からは「香濤、廉卿」が指す張姓の二人はそれぞれ張鳳挙、張申府だと推定できる。

1925年、林語堂は『語絲』の主な寄稿者の一人であった。周作人が書簡で触れたこの宴会は『語絲』社の同人が、廈門に発つ林語堂を歓送するため設けたものだった。

周作人1925年6月24日の日記もこの宴会について詳述している。「六時、連れ立って公園内の長美軒に向かう。主催者は周、錢、孫、章、李の五人、招待客は玉堂夫婦、紹原、申府、平伯、頡剛、鳳挙で、計十一人」⁴⁴。同日は水曜日で、会場の長美軒も前出の周作人の錢玄同宛書簡（1925年6月25日）の内容と合致している。さらに錢玄同の周作人宛書簡（1925年6月25日）を参照すれば確証が取れる。

錢玄同の周作人宛書簡（1925年6月25日）は周作人の錢玄同宛書簡（1925年6月25日）への返信であり、書簡には「折よく袁姁からの手紙を拝受、拝読。二つの『絶倒』と『年季入りの国粹（老牌国粹）』について知りました」⁴⁵とある。前述のとおり、周作人は6月25日書簡に「絶倒」「老牌国粹」について記している。また、落款には「袁姁日」とある⁴⁶。

錢玄同はこの書簡で、1925年6月24日に周作人らが参加した長美軒での宴会に触れている。周作人は書簡に「この時既に貴兄が入院し、連れ立って来ることは叶わないとわかっていたので」と記しているが〔前後の内容は注52参

43 同注36

原文：此二位烹妾山人的本家，其一人的號系四靈之一；其一系十二支之一，其字義照『景山樓說文』蓋頗不雅馴雲。

44 同注6、446頁。

45 同注42、66、70頁注釈には同書簡が『魯迅研究資料』第12輯からの引用とあるが、実際は『魯迅研究資料』第10輯（天津人民出版社、1982年）からの引用。北京魯迅博物館所蔵錢玄同書簡の整理作業によると、「適得表姁の來信、敬悉」の「表姁」は誤植で「袁姁」が正しい。

46 同注36

照)、銭玄同も書簡にこう述べる。「私が某医院で腕を治していた日、公等はまさに東興楼(長美軒の誤り)でリングを歓送していたのです」⁴⁷。周作人書簡は会場について「初めは東興を予定していたのが、思いがけずストライキに入っていたので長美に変更せざるを得」⁴⁸ず、と記している。一方、銭玄同書簡は療養中偶然林語堂に出くわした場面を描写しており、これも確かな証拠となっている。

今日「食を求め」行った場所で林檎君⁴⁹に出くわしました。彼は「やつれた面持ちで、顔色も暗く」私に労りの言葉をかけると、またこう言うのです。「私は明日将に南へ帰らんとするのです。私たちは握手で別れましょう」。その後我々ふたりは「皮考史〔because〕」とお互い言って別れたのです。「明日将に南へ帰らんとす」と彼が口にした時、我は彼に言いました。「ご馳走させていただきたいのですが、出発を一日延ばせませんか？」彼は「昨日もうご馳走になりましたよ、主催者の中にご高名を拝見しました」と答えました。そこで今日は二つ伺いたいことがあります。

(1)昨日の東興楼(長美軒の誤り)の宴会で、あの方は「国事を語」りましたか？彼の见解はあなた、一公、小土諸君のいずれとも異なります。この宴席ではいったいどのように酒を酌み交わし、お楽しみになったのでしょうか。(「語」ったのであればですが)⁵⁰

47 同注42。〔訳注：「リング(原文：苹果)」は林語堂を指す、注49参照〕

48 同注36

原文：初定東興，豈知先期罷市，不得已而改在長美。

49 「林檎、林語堂を指す」、注釈③、同注42、67頁。同書簡の初出は『魯迅研究資料(10)』(北京魯迅博物館・魯迅研究室編、天津人民出版社、1982年10月、6-9頁、7頁)で、注釈では林檎を林語堂とする根拠として1925年6月24日周作人日記を挙げている。〔訳注：引用元資料の原文には「林檎」とあるが、「林檎」の誤植と考え、本訳稿では表記を改めている。〕

50 同注42、第67-68頁。

「明日」まさに南に帰る林語堂は、銭玄同と「昨日」の長美軒での宴会の話になり、主催者の中に銭玄同の名前はあったが、銭玄同は出席していない。これらの日時、地点は「周作人の銭玄同宛書簡」（1925年6月25日）が言及する内容と一致する。「押不盧先生は金曜日の快速列車に乗ってピンランに帰らねばならないと決まっていたので、我々は水曜日に食事するしかなかったのです」⁵¹。場所は「初めは東興を予定していたのが、思いがけずストライキに入っていたので長美に変更せざるを得ませんでした。この時既に貴兄が入院し、連れ立って来ることは叶わないとわかっていたので、敢えて『林炳炎の花畑』にしたわけです」⁵²。時系列を整理すると、水曜日に長美軒で宴会があり、木曜日に銭玄同は林語堂に出くわし、金曜日に林語堂は南へ帰ったことになる。押不盧先生が向かう場所「ピンラン」は「閩南」の日本語読みと考えられ、「南」と合致し、ここでは廈門を指している。

銭玄同の周作人宛書簡（1925年6月25日）では「亭林」についても述べられている。「〔亭林が〕平時、国故や線装書、妙峰山、孟姜女を語るのに私はたいへん傾倒している」⁵³とあるが、この描写からは「亭林」が顧頡剛であることが明らかに読み取れる。

上述の論証から、曲園は俞平伯、香濤は張鳳挙、廉卿は張申府、亭林は顧頡剛、良庭と良庭夫人は江紹原と江紹原夫人をそれぞれ指すと推断できる。宴会に招かれた招待客は『語絲』の寄稿者であり、「主催者は周、銭、孫、章、李の五人」⁵⁴というのは即ち周作人、銭玄同、孫伏園、章川島、李小峰であり、すべて語絲社の主な同人である。この送別会は語絲社の集まりでもあったの

51 同注 36

原文：押不盧先生因定須乘拜五快車回ピンラン去，我等只能於拜三舉行吃飯。

52 同注 36

原文：初定東興，豈知先期罷市，不得已而改在長美，因此時已知老兄進院，不能同來，故而闊胆定在「林炳炎之花圃」也。

53 同注 42、第 69 頁。

54 同注 6、446 頁。

だ。周氏兄弟は当時既に不和を生じており、周作人を避けるため魯迅は語絲社の集まりにはさほど参加しなかったと自ら述べている。「それ以来さかり場の茶館や料理屋の部屋の入口などに、『語絲社』と書かれた札が掛けてあるのをときどき見かけるようになった。もし足を停めれば疑古玄同先生の早口でまくしたてるよく響く声が聞こえたかもしれない。しかしわたしはそのころ宴会を避けていたので、部屋のなかの様子は、まったくわからない」⁵⁵。

「周作人の錢玄同宛書簡」（1925年6月25日）は『語絲』の原稿手配についても論じており、晦渋な筆致で、人事に話が及ぶと人名には全て別称を用いている。

蕓客によると、次期『雨絲』の原稿はまた恐慌気味だそうです。ですから穆、張、周の三篇を先に掲載する予定で、玉稿は二期後に発表するのが良いでしょう。これでどうにか調整がとれます。小生も急いで執筆すべきではありますが、しかし早くても三十五期掲載分となります。それで構わなければ、原稿を白華絳附閣に直接送り届けてください。⁵⁶

「蕓客」と「白華絳附閣」は、どちらも本来、李慈銘〔清末の詩人、「越縵先生」とも〕の別称である。ここでは同じく「李」姓の李小峰を指している。書簡ではこのように晦渋な筆致で『語絲』の原稿手配を論じており、周作人が当時『語絲』の編集に携わっていたことの明らかな証左となるだろう。書簡の内容および『語絲』の目次に照らすと、「穆、張、周の三篇」とは『語絲』第三

55 「我和『語絲』的始終」『魯迅全集』第4巻、172頁。〔訳文は「わたしと『語絲』の顛末」『魯迅全集』第5巻（松井博光責任編集・翻訳）、学習研究社、1985年、364頁より引用。〕

56 同注36

原文：據蕓客說『雨絲』下期之稿又略恐慌，所以擬將穆張周三文先行登載，尊文則在二期後發表亦可，如此庶能調劑。敝人雖當趕緊執筆，但至早也只能應三十五期之用耳。如以為可，請將該項文件直接寄交白華絳附閣去可也。

十四期掲載の穆木天「寄啓明」、張定璜「敬答穆木天先生」、周作人「答木天」だと考えられる。穆木天の投書は啓明宛のものではあったが、銭玄同「写在半農給啓明的信底後面」を契機に書かれていることから、同号には銭玄同「敬答穆木天先生」も掲載されている。このほか同期には陶孟和・周作人「寛容之難」が、第三十五期には張申府「帝国主義等」、兪平伯「美人画磚拓本」が掲載された。

銭玄同は周作人宛書簡（1925年6月25日）で『語絲』の原稿手配について返答している。「黎公の手紙に、私は明日（金）、明後日（土）、明明後日（日）、その翌日（月）の四日のうちに書き上げ、越縵に送るつもりだと返事しました。もし月曜日になってもまだ原稿が完成していなければ、その日のうちにお言いつけどおり先に伯長、濂溪、横渠の三篇を送って載せる手筈です。ですから次の月曜日には必ずお送りします。三人分、或いは四人分です。この考えは小弟が責任を持って越縵公に手紙で伝えます」⁵⁷。「越縵」は李小峰を指す。銭玄同が執筆していた原稿は前述の「敬答穆木天先生」だろう。脱稿日は1925年6月28日と記されている⁵⁸。

北京期『語絲』の主な編集者は周作人だった。1930年魯迅は「わたしと『語絲』の顛末」に北京を離れるまでのことを書きとめ、『語絲』は「そのころ実際に誰が編集していたのかわたしは知らなかった」⁵⁹と述べているが、その編集者が実際は周作人および新潮社であることに陰では触れていた。

「『莽原』と『語絲』、わたしは『莽原』を編集しただけで、『語絲』は周作人が編集したもの、わたしは寄稿しただけです」⁶⁰。「『語絲』は彼ら新潮社の中かの何人かが編集しているものです。二、三回原稿を紹介したことがあります。みな今になってもなんの返事也没有。それで彼らに送ってやる気は

57 同注42、70頁。

58 『語絲』第三十四期、1925年7月6日

59 同注55、172-173頁。〔訳文は365頁より引用。〕

なくなりました」⁶¹。この時期『語絲』に掲載された発刊辞や編集付記にも、周作人の編集者としての立場が反映されている⁶²。週刊誌『語絲』の住所は第一期から六十四期に至るまで一貫して「北京大学第一院新潮社」と記され、第六十五期（1926年2月8日）に初めて住所を「北京大学第一院語絲社」に変更している。孫伏園は『京報副刊』を編集するようになり、『語絲』にさほど口出ししなくなった。外部から原稿が送られてくると李小峰は一律周作人に送り、掲載の可否をゆだねた。その結果、李小峰が章衣萍の同行を得て度々魯迅に原稿執筆を依頼するのを除くと、事実上周作人が固定の編集者となっていた⁶³。周作人が1925年6月25日銭玄同に宛てたこの私信は、周作人の『語絲』編集者としての立場を強く裏付けるものであると同時に、当時の語絲社同人の活動状況を伝えている。

三

1923年、周作人は銭玄同に手紙を送り、自身が北京大学に原稿を提出したことを伝えたほかに、魯迅が最近発表した見解には所謂国学家を批判する文章を書く意も含まれていると伝え、銭玄同に原稿を取りにいくよう依頼した。「魯君はまたこの機に乗じて所謂『辜倭^ㇿ庶倭^ㇿ幾唾^ㇿ』を痛罵する向きもあるようです。しかし小生は彼がいつ筆を執るかは断定できず、貴殿が早いうちに彼から原稿を得たいならば、『噂に聞いたのですが……』云々と手紙で催促し、同時に締め切り日を提示すれば、どうにか完成させられるでしょう。この密告、

60 「331105 致姚克」、『魯迅全集』第12巻、479頁。〔訳文は『魯迅全集』第15巻（竹内実責任編集・翻訳）、学習研究社、1985年、172-173頁より引用〕

61 「250217 致李霽野」、『魯迅全集』第11巻、458頁。〔訳文は『魯迅全集』第14巻（竹内実責任編集・翻訳）、学習研究社、1985年、160頁より引用〕

62 『語絲』第一期発刊辞、第八期「滑稽似不多・通信二」、第十四期「理想中の教師」附記、第十八期「啓事」（「我不是主任の編輯人」）、第七十一期「我們的閑話」（同欄は外部原稿は掲載しなかった）。

63 荊有麟「魯迅回憶断片」、『魯迅回憶録』（專著）上冊、魯迅博物館・魯迅研究室、『魯迅研究月刊』選、北京出版社、1999年1月、197頁。

公にはされないよう」⁶⁴。「辜倭^ㇿ庶倭^ㇿ幾啞^ㇿ」は国学家を指す。周作人は当時北京大学で教鞭をとり、錢玄同との行き来が頻繁だった。そのため錢玄同が原稿依頼をする際、時に仲介役となることもあった。周作人が書簡で錢玄同に渡したとしている文章は1922年12月31日脱稿の「漢字改革的我見」と見られ、『国語月刊』第7期に掲載されている。この文章で周作人は「所謂『国学家』」⁶⁵を批判している。

1925年5月13日、周作人は錢玄同宛書簡の中で、「新聞記事によると立早（カ一 ㇿ ㇿ [立早の注音符号]）『吾弟』が辞職の意を示しているとのことで、本当に隠居するのかわかりませんが、あるいは觀雲山人の所謂『うまい汁を吸いに』行くというやつでしょうか。噂では後任には既に運動をしている者がおり、一人は江翊老、もう一人は誰だと予想されるでしょう。ほかでもない、飯を吃不^くわない者だとか」⁶⁶。ここでの「立早」は「章」のことで、章士釗を暗に指している。二人の後任運動家とは、一人が江庸〔1877-1960、字は翊雲〕でもう一人が屈映光〔1883-1973〕である。1925年7月9日、魯迅も許広平宛書簡においてこのことに触れている。「新聞によれば、章士釗辞め、屈映光がこれを継がんとということです。これ、すなわち浙江のかの有名なる『兄弟素より飯を吃不^くらわざる』人^{それがしもと}で、士釗とはけだし伯仲の間にあるか、あるいはまさにおよば

64 「周作人致錢玄同」1923年1月1日、『魯迅博物館藏近現代名家手札』（一）、北京魯迅博物館編、福建教育出版社、2002年9月、45頁。

原文：魯君仿佛亦有借此破口大罵所謂辜倭^ㇿ庶倭^ㇿ幾啞^ㇿ之意，但敝人尚不能斷定其何日下筆，足下如欲其早日做成，似可「側聞……」云云之信催促之，并与以一截止之日期，則庶乎其告成之望也夫！特此告密，不宣。

「汗字の文章は、もし水曜、成均に行くなら手渡ししましょう（原文：汗字の文章，如拜三往成均去，当面交）」とある。「成均」は北京大学を指す。

65 周作人「漢字改革的我見」、『周作人散文全集』第2巻、鐘叔河編訂、広西師範大学出版社、2009年、845頁。

66 「周作人為『語絲』約稿事致錢玄同函」、1925年5月13日、未公刊書簡、北京新文化運動紀念館所蔵。

原文：報載立早（カ一 ㇿ ㇿ）『吾弟』大有掛冠之志，不審係真要肥遁，抑或係觀雲山人之所謂去「撈一把」歟。風聞後任已大人運動，一為江翊老，又一人試猜為誰？乃是不吃飯者云。

ざらんといったところ」⁶⁷。同書簡では章士釗が辞職することをはっきりと記しているだけでなく、さらに周作人が書簡で触れた後任運動者「飯を吃わない者」とは屈映光であることを示している。屈映光は浙江臨海人で、当時は北洋政府臨時参政院で職務についていた。1925年5月17日『京報』によると、「教育総長の人選……その呼声最も高き者は林長民、江庸、屈映光等だ」⁶⁸った。『屈映光紀事』には以下のようにある。「映光、前年、京に赴き覲見す、友某のその晚餐に招くあり、映光書を復してこれに謝して曰く、弟向て飯を吃せず、さらに晚餐を吃せず云々と。京の内外伝えて笑柄と為す」⁶⁹。

67 『両地書』（三四）、『魯迅全集』第11巻、人民文学出版社2005年、102頁。〔訳文は『魯迅全集』第13巻（中島長文責任編集・翻訳）、学習研究社、1985年、136頁より引用〕

68 同上、注釈(2)、103頁。〔同上〕

69 同上